

リフォーム前後の写真

構造 在来木造



本作品は、北陸の田の字型プランの住宅をリフォームしたものである。田の字型プランは日本全国に数多く存在するが、今日では、広すぎて冬は寒く、人の寄りつかない空間になり、居住性のゆえに取り壊されることも多い。それはかつての「いろり空間」が失われてしまったせいでもあるが、水回り改修により快適な現代生活が過ごせ、家族が再び集まる空間に改修でき、住宅が再生できることを示している。

まず目につくのは、台所中央のアイランド式流しとレンジ、これにつながり和室に真っ直ぐに伸びる木のテーブルである。台所床とテーブル下、洗面所・浴室床には床暖房が入っている。これは、広くて隙間の多い住宅の部分改修において、効率よく暖を取るには、床暖房が最適との判断による。改修部分の居間と奥の和室十畳の間は新たに壁で仕切っている。風の強い地域で、平成3年の台風19号では家が大きく揺れた経験から耐震補強したもので、家族数の少なくなった現在の生活にも対応している。レンジは、板貼り天井の空間に合うものとしてIHヒーターを採用し、新考案のカウンターに収納できるレンジフードを何回かの試行錯誤を経て実現した。電気温水式床暖房により暖房費は以前に比べ月1万円減少したという。

この住宅で特筆すべきは、明確な設計ポリシーであり、そのポリシーに裏付けられた水回り設備設計の質の高さである。そのポリシーとは、建築と設備とは一体に計画されるべきものであり、設備は既成品のアッセンブリー設計にはしないというものである。それらは、設計図によく現れている。設計者は、設計図に設備、配管、接続部の全てを詳細図に書き込む力量を有していた。それだけでなく、設備は全て、住人によるメンテナンスのし易さが考えられている。その一例が、裏側からメンテナンスアプローチでき

るアイランドキッチンであり、抜き差しでき清掃しやすいレンジフードであり、浴室の独立設備柱である。浴室のガラス壁も気密性・水密性・メンテナンスを考慮した結果採用されたものである。このガラス用のサッシは、近くにサッシメーカーの工場があることから、カタログ掲載以外の型番から最適の型を選んでいる。建築と設備の一体設計により、施工における建築・設備間の齟齬がなくなり、指示もすでに図面上で明確にできている。現場監理には、メールによる日々の現場写真の結果報告と翌日入る職人名の予定報告、これに対する指示という方法を用いている。

この事例は、リフォームマネジャーの職能はいかにあるべきかをも示している。すなわち、建築も設備も十分に理解していることは勿論であるが、詳細レベルまで建築図に書き込み、設計できる資質を有すべき事を示している。一般的には、これは望ましい事ではあっても現実には無理と判断されている。しかし、もし、そのような姿が望ましいとすれば、大学・企業等における建築教育のあり方を変える必要性のあることをも示している。そのような問いかけを示した質の高い作品であり、改修による波及効果の高い作品として特別賞に値するものと判断した。